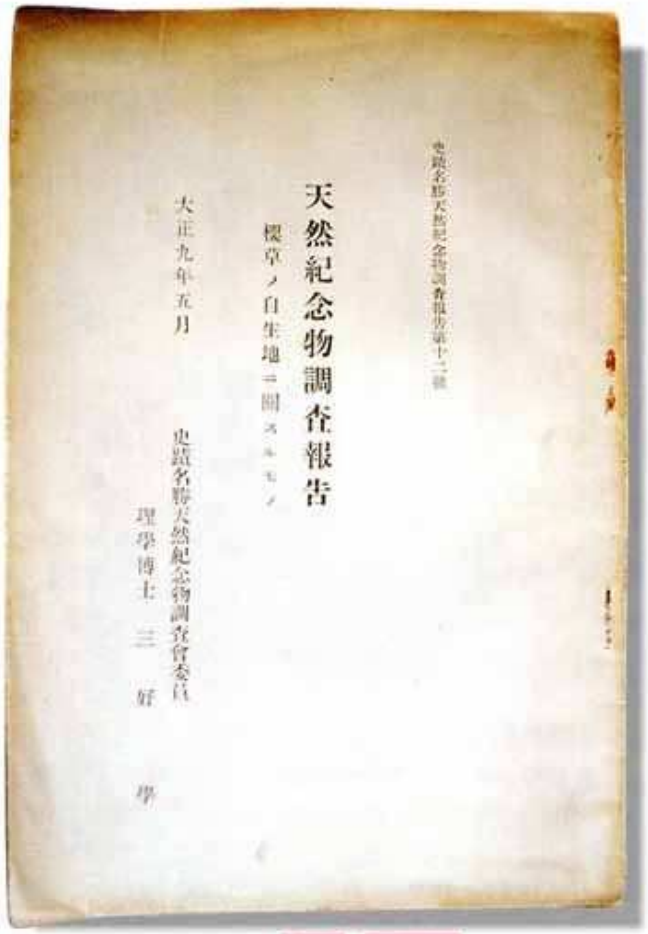
SAKURASOH PRIMULA SIEBOLDII SAKURASOH PRIMULA SIEBOLDII

さくらそう通信

5号
1998.2.27



史蹟名勝天然紀念物調査報告第十二號

天然紀念物調査報告

櫻草ノ自生地ニ關スルモノ

大正九年五月

史蹟名勝天然紀念物調査會委員
理學博士　三　好　學

大正9年7月「土合村桜草自生地」天然紀念物指定

大正5年（1916）4月、土合保勝会が「国民新聞」にサクラソウの保存を訴えたことに始まる田島ケ原サクラソウ自生地保護の動きは、大正9年（1920）7月の天然紀念物指定へと結実されました。この指定に先立って同年4月に実施された史跡名勝天然紀念物調査会委員三好学理学博士の調査結果は、内務省発行の「史跡名勝天然紀念物調査報告第12号」に「天然紀念物調査報告―桜草ノ自生地ニ関スルモノ―」として報告されています。今号では、その内容をカラー口絵も含めてご紹介します。なお、この報告書は東洋大学教授大野正男氏からいただいたものです。

史蹟名勝天然紀念物調査報告第12号
天然紀念物調査報告

桜草ノ自生地ニ関スルモノ

大正9年5月　史蹟名勝天然紀念物調査委員
理学博士　三　好　　學

大正9年5月 天然紀念物調査報告―桜草ノ自生地―

所在　埼玉県北足立郡土合村字西堀、関並ニ田島ノ一部（民有地）

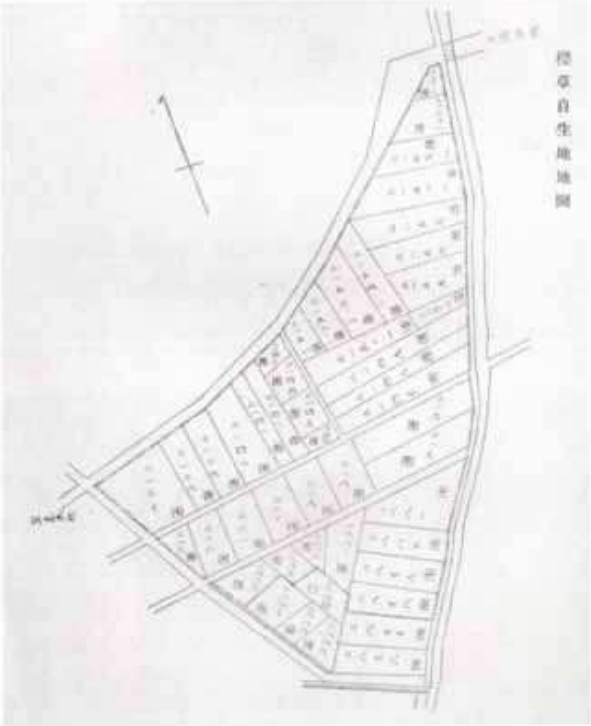
地積　約4町歩

土地ノ状態　東京市ヲ貫流スル隅田川ノ上流ナル荒川ノ沿岸ニハ古来桜草ノ多ク発生セル原野アリ是等ノ原野ハ屢々河水ノ氾濫ニヨリ泥土ヲ蒙ムリ養分ニ富メルモ平時ハ地面乾固シ亀裂ヲ生ゼルヲ見ル土壌ノ状態普通ノ原野ト異ナルニヨリ従ッテ植物ノ群落ヲ異ニシ其中最モ固有ナルハ桜草ニシテ仲春ノ頃ニハ原頭一面紅花ヲ以テ飾ラレ之ト交リテ黄色ノ野漆、紫色及ビ白色ノ菫、紫色ノ丁字草、紅紫色ノむらさきけまん・やぶえんごさく・黄金色ノひきのかさ等花ヲ開キ恰モ天然ノ花園ノ如ク一大美観ヲ呈ス

夏時ニハ植物ノ群落一変シ目ちがやノ発生盛ニシテ高サ人長ヲ超エ秋ニ至レバちがや刈取ラレ原野ハ再ビ裸出シ明年桜草ノ発生ニ便ナリ

天然紀念物トシテノ桜草ノ自生地　桜草ハ外国ニテハ亜細亜ノ東北部ニ産シ我邦ニ於テハ北海道、本州及九州ニモ産スレドモ而カモ其産地ハ特殊ノ場所ニ限ラレ且土地ノ辺鄙ニシテ天然紀念物トシテノ研究又ハ観覧ニ不便ナル処多シ

桜草ハ花ノ美ナルノミナラズ先天的変化ニ富ミ花ノ形態、大小、色彩ニ種々ノ別アルノミナラズ花茎ノ長サ、花茎ノ毛ノ密度等モ一様ナラズ今花部ノ変化ノ著シキモノニ就テ述ブレバ花冠ノ五片ヨリ成レル正形ノ外ニ六片、七片又ハ更ニ多片ノモノアリ又各片ノ幅広クシテ互ニ密接シ又ハ辺縁ニテ重ナリ合ヘルモノト幅狭クシテ間隙ヲ残スモノトアリ其ノ他片端部ノ広クナリ又ハ不規則トナレルモアリ色ハ紅色ヲ普通トスレドモ往々濃紅、帯紫紅ナルモノ、淡紅、極淡紅ナルモノアリ又絞リ、線入、更紗、砂子トナレルモアリ稀ニハ純白ノモノサヘアリテ原頭ニ一異彩ヲ放テルヲ見ル。



培養セル桜草ニ於テ夥シキ品種ヲ生ゼルハ人ノ知ル所ナルガ同植物ノ野生種ニ於テ已ニ上記ノ変化ヲ呈セルハ著甚ナル現象ト云フベシ是レ蓋シ同植物ノ先天的特徴ニ由ルモノニシテ植物品種改良問題ノ頻ニ攻究セラルル今日ニアリテハ野生ノ桜草ノ如キハ正ニ該問題ノ解明ニ関シ適当ナル材料植物トシテ注目スベキモノナリ加之桜草ハ夙ニチャールス・ダルウィン氏ノ示セル如ク一花中雄蕊長ク、雌蕊短キモノト、雄蕊短ク雌蕊長キモノトアリテ受精上一定ノ配合ヲ要スルハ已知ノ事実ナリ此点ヨリ見ルモ桜草ハ研究材料植物トシテ必要ナルハ言ヲ俟タズ

桜草ハ前ニ記載セル草類ト自然ノ群落ヲ形ヅクリ生存上相互ノ関係アレバ桜草ノ保存ニハ同時ニ諸他ノ草類ヲモ保存スルヲ要ス随テ桜草自生地ハ之ヲ天然紀念物トシテ保存シ人為的変化ヲ蒙ムラシメザルヤウ注意セザルベカラズ保存地域ニシテ狭キニ失スルトキハ周囲ノ影響ヲ受ケ桜草ノ発生状態ヲ危クスルノ処アレバ

適当ナル程度ニ於テ一定ノ地域ヲ保存スルノ必要アリ前ニ記セル地積ハ此目的ニ合フモノト信ズ

名勝トシテノ桜草原野　前ニハ天然紀念物トシテノ桜草自生地ノ保存ニ就テ述ベタルガ名勝トシテ見ルモ桜草ノ発生セル原野ハ大切ナルハ論ヲ俟タズ旧幕時代ニハ江戸ニ近キ浮間ケ原、戸田原等ノ荒川沿岸ノ原野ハ桜草ノ名所トシテ知ラレ旧時出版セル名所案内、花鳥暦ノ類ニハ載セザルハナシ是等ノ原野ハ明治20年頃マデハ多少旧態ヲ保テルガ其後土地ノ変化、遊覧者ノ濫採、商売人ノ過度ノ採集等ノ為メニ今日ニテハ同地方ノ桜草ハ殆ンド採リ尽サルルニ至レリ幸ニ荒川ノ上流沿岸地方ニハ今日尚桜草ヲ産セル処アルモ多クハ交通不便ノ為メ観覧ニ適セズ此点ヨリスレバ前記ノ土合村内ノ桜草産地ハ浦和町ヨリ僅ニ一里ニ過ギズ且つ車馬ノ便アルヲ以テ名勝トシテモ保存スルニ適当ナル土地ト云フベシ

近年該原野モ次第ニ世ニ知ラレ遊覧者多キヲ加ヘ随テ桜草ノ採去ラルルモノ夥シクナレリ故ニ速ニ同原野ヲ天然紀念物トシテ指定シ以テ学術ノ考証ニ資シ一ハ帝都付近ニ美麗ナル武蔵野ノ一部ヲ有数ナル名勝トシテ遺サンコトヲ希望ス

桜草原野ノ光景並ニ固有植物ノ図画ニ関シテハ左記ノ自著ニ載セタリ

日本之植物界　161頁并ニ第10図版

人生植物学　329頁并ニ巻首図版

桜草原野保存ノ必要（東洋学芸雑誌第455号　大正8年）

増改訂版　最新植物学講義　中巻　817頁

付記　前記ノ土合村ノ桜草産地ハ俗ニ田島ケ原ト称セラルル処ニシテ本員ハ去ル大正5年4月下旬土地ノ有志家深井貞亮氏其他ノ案内ニヨリテ戸川安宅氏ト共ニ視察シ天然紀念物トシテ価値ノ大ナルヲ認メタリ爾来深井氏等ノ熱心ニヨリテ同地ニ保勝会設立セラレ桜草ノ保存ヲ図レルガ其後屢々深井氏ヨリ近年ニ至リ同地ノ桜草ノ濫採益々多キヲ聞キ切ニ保存ノ必要ヲ感ゼリ次デ本年4月25日本員ハ史蹟名勝天然紀念物調査会幹事山田準次郎氏、同渡部信氏、同会臨時委員荻野仲三郎氏、同会考査員吉井義次氏等ト同地ヲ視察シ現状ヲ調査セリ本報告ハ前後二回ノ視察ニヨリ起草シタルモノナリ

（史蹟名勝天然紀念物調査報告第十二号　1920）

地生自草櫻原島田篠玉埼版圖一第

(二) 化變ノ花ノ草畑ノ生野
(大熊自)

(一) 化變ノ花ノ草畑ノ生野
(大熊自)

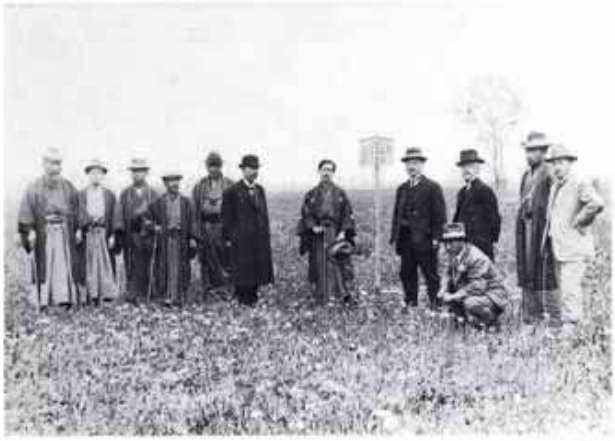
理学博士　三好　學

植物生理学者。(1862．1．4～1935．5．11)

明治22年（1889）東京帝国大学（現東京大学）卒。大学院の途中でドイツへ留学。ライプチヒ大学で植物生理学を学び、帰国後は東大教授として学生の指導にあたるかたわら、自らも幅広い研究を続ける。著書も多く、専門書から随筆集まで多岐にわたり、ヨーロッパの植物学を紹介する著書で「植物生態学」という造語を初めて用いている。

明治39年（1906）に天然記念物保存の必要性を訴え、その後は内務省の天然紀念物調査会委員などに就任し、天然記念物保存の立法化に尽力した。

参考資料　「現代日本　朝日人物事典」朝日新聞社



写真は大正5年4月25日に、田島ケ原を視察する三好学博士一行と、案内の深井貞亮氏ほか土合村有志の方々です。右から5番目の人物が三好博士です。
(写真　深井亨二氏　蔵)

さくらそう通信
平成10年2月27日
編集・発行　浦和市教育委員会
浦和市常盤6-4-4
☎048-829-1796
印　　刷　関東図書株式会社

浦和市

題字　教育長　浅見　匡